

比較文學研究

小特輯 東アジア

巻頭言：「東アジア比較文学史」の構想……………川本 皓嗣 (1)

ゴッホは文人画家か——豊子愷のゴッホ観……………西根 偉 (4)

近世の韓・日儒教訓書——『東國新續三綱行實圖』

「本朝女鑑」「本朝列女傳」を中心として……………嚴 基 珠 (29)

咄における継承と創造——二代目円生から円朝へ……………延寶 眞治 (49)

サリンジャー作「小舟にて」——幼児家族の救い……………渡辺 正 (67)

母と息子の物語——鶴見祐輔の「母」をめぐる……………中川 克子 (90)

[追悼・神田孝夫教授]

わがコーチ、神田さんを憶う……………亀井 俊介 (110)

弔辞……………小堀桂一郎 (114)

神田先生に教えられたこと……………小宮 彰 (117)

神田孝夫先生追悼記……………古田島洋介 (120)

[書 評]

『バシュラール——科学と詩』(金森修)……………松浦 俊輔 (123)

『オリエンタルな夢——小泉八雲と霊の世界』(平川祐弘)……………稲賀 繁美 (128)

『異文化への視線——新しい比較文学のために』

(佐々木英昭編)……………菅原 克也 (134)

『西洋・近代』は超えられるのか?——佐々木英昭編

『異文化への視線』および松村昌家編

『比較文学を学ぶ人のために』をめぐる……………小谷野 敦 (143)

『青空——フランス象徴詩と日本の詩人たち』(水島裕雅)……………小川 敏栄 (150)

『「甘え」で文学を解く』を説く……………鈴木 啓之 (153)

『若きバルク 魅惑』(ヴァレリー 中井久夫訳)……………君野 隆久 (158)

『ある明治人の朝鮮観——半井桃水と日朝関係』

(上垣外憲一)……………鄭 長豊 (163)

[Le Rond-Point]

榎本泰子氏博士論文「近代中国と西洋音楽——

上海音楽学院を中心に」審査結果の要旨……………川本 皓嗣 (168)

榎本泰子氏博士論文審査傍聴記……………指村 恵子 (170)

「すべからく」考……………古田島洋介 (172)

半井桃水「胡砂吹く風」について……………水野 達朗 (176)

外国語要約……………(1)

70

東大比較文學會

をえないはずだ。バシュラールの二面性を見て、科学の人も文芸をたしなむし、そういううるおいがやはり必要なのだと安心してはならない。他者に向けて何かを語る以上、どこかで個人を離れた冷たい原理に訴えざるをえないはずであり、その原理は個人的主体を離れたところにあるという、バシュラール本来の根幹を見逃してはならないだろう。

本書では、著者自身が序章で「読者は第一章から順に読み進めてくだされば、バシュラールの仕事のほとんどについてだいたいの感じはつかめるだろう」と記しているように、バシュラールの足取りが、主要な著作を手がかりにして、またそれぞれの時期の性格づけを明確にしつつ、順を追ってたどられていく。著者の語り口は、序章「ジャムとベンゼン」に典型的に見られる、バシュラールへの暖かな（！）眼差しを思わせ、心地よく読める。また、科学認識論、とくにフランスのそれについてのコンパクトな背景説明が適宜なされており、その方面についての入門書ともなりえている（本書は「現代思想の冒険者たち」という、一般向けの解説を念頭においたシリーズの一つである）。しかし、本書が呈示する科学哲学者としてのバシュラールの中に何よりも見なければならぬのは、科学という文化について、たんにそれを探るか棄てるかという不毛な扱いに陥らない形で、ありのままの受容・消化・評価が、現代社会の一つの重要な課題だということではないだろうか。

平川祐弘 著

『オリエンタルな夢』

—— 小泉八雲と霊の世界 ——

（筑摩書房、一九九六年）

稲賀繁美

1

一九九四年夏、スイスのローザンヌ大学で、「藝術家のイメージ」と題して国際美術史学会研究集会が開催された。その席でベルリン自由大学のアンジェリカ・リーガーがマルグリット・ユルスナールの「Comment Wang-Fé fut sauvé」を論じた。多田智満子訳の『東洋綺譚』に「老絵師の行方」として訳出されている掌編である。質疑応答となつて、「画家が自分の描いた絵のなかの舟に乗つて画面のなかに消滅するという筋は、中国の道教の逸話に題材を求めたとユルスナールは自註をつけているが、直接の材源はラフカディオ・ハーンの「果心居士の話」だ、との推定が平川教授によつて既になされている」と発言してみた。大学の階段教室いっぱいの聴衆が一斉にさつと振り向いた様が、いまでもまざまざと思い出される。

学会の話題はとかくヨーロッパ美術に限定されがちで、極東からの唯一の参加者はいささか場外れとも見えかねない状況だった。それだけに、はるばるヨーロッパまで来た甲斐があったような気がし

て、正直嬉しかった。これがきっかけで、リーガー女史やオスカ・ベッチュマンといった参加者とも親しくしていただくことになった。平川論文を縁とした出会いであり、またそうした論文の存在を少しでも海外に知らしめるお手伝いのできたことも、評者にとつては幸な経験だった。およそ外国でも通用するような情報というのは、煎じ詰めてゆくと案外限られたものに目減りしてしまう。比較文学・比較文化といった領域がそうした希少な流通貨幣を独占すべき領分だとは言わないにしても、何が選別に耐える材料かを恒常的に吟味・試験する場たりえる（たかねばならない）宿命を背負っていることは疑えまい（ちなみにリーガー女史は、東京大学大学院の比較文学比較文化課程に在学したコンラッド・キンスキーの論文——ユルスナールの物語の典拠としてアーサー・ウェイリーの『中国絵画研究入門』の註にある呉道子の有名な逸話を知っていた可能性を示唆したもの——は読んでいた。つまり平川論文に到着するまであと一步のところで小生と出会ったことになる。）」

この「果心居士の消滅」も今回の『オリエンタルな夢』にその日本語版が収められている。著者はこの話題を、東京大学を退官する直前の八王子大学セミナー・ハウスでの春の学科合宿の講演で取り上げた。佐藤重紀の『バルタザールの遍歴』こそ登場しなかったものの、アポリネールの「オノレ・シユブラックの消滅」やマルセル・エメの「壁またぎ」まで動員されるその変幻自在の論旨には、さながら見事な手品を見る思いだったが、実は当時すでに著者はバンクーヴァーで同様の趣旨を英文で発表していた。つまり用意周到なる著者は、英語圏で自説の有効性を試験したあとになって、これを（外国人留学生を含む）日本の大学院生相手に、おそまきながら

日本語で「再演」していたことになる。⁽³⁾

この平川氏の後塵を拝して、評者も一九九六年、ダブリンはトリニティー・カレッジで開催された「言語と映像第四回国際研究会」の席で、同じ話題を違った角度から論じてみた。そんな屋上屋を敢行したのは、ひとつにはハーンが暗い幼少時代の一時期を、ほかならぬこのダブリンで過ごしていたからだ。だが、そのことを——というより日本人作家小泉八雲ことラフカディオ・ハーンを——知る者は、学会への参加者中には皆無に等しかった。

あえてハーンのこの小品を取り上げたのは、絵を語る絵解き文学（エクフラシス）の研究という常套ではなく、逆に「文字による絵画」を論じ、文学のなかに創造された虚構の絵画という不在のトポスにみられるフィクションの構造を手掛かりにして、東西美学の交流による変成の現場を浮かび上がらせよう、という趣向からである。さらにはハーンが石川鴻斎の『夜窗鬼談』から再話した物語をマルグリット・ユルスナールが利用したなら、今度はそうした論をなした平川教授の仮説と論法とを利用して、再度の再話によって、言語と絵画との相互関係という領域で新しい提案を試みよう、という魂胆も潜んでいたわけである。⁽³⁾

西欧の読者を意図して練り直された「オリエンタル」の物語には、東洋の文人画理念との微妙だが無視できない差異も胚胎されているだろう。平川氏はそれを西洋のミメシスの美学に対して東洋のアニミズムの美学と大胆に対比する。「創造」creation に対して「発生」generation を立てるこうした論法は、分かりやすくてインパクトもあるため評判にもなりやすいが、ときには危険な図式化として論議や感情的な反発をも呼ぶ（一五九頁）。しよせん東洋と西洋は

別だとする決めつけは、西洋人には「氣韻生動」の東洋の美学は分るまいとする拒絶と締め出しの身振りの裏で、東洋に西洋に匹敵するか、それを凌駕さえする「精神性」を受けろがごとき居直りをも匂わせるきらいがある。二十世紀初頭から日本の中国学者や、それを汲んだ中国人たちがなした東洋画優位説も、こうした西洋に対する歪んだ精神的コンプレックスと無縁ではなかった。西洋の聴衆を排除した席でこの種の論法を振りかざすのでは、いかにも内弁慶だが、逆に西洋の聴衆に同様の主張を納得させようとするれば、これはひとりよがりなお国自慢とも誤解されかねぬ。ひいてはそれが、西洋の学界が主張する普遍的な方法論や学問作法そのものへの異議申し立てすら隠している場合もあつて、ことは（表向きはそのことを否認しながらも）不毛な神学論争の様相を呈する危険を秘めている。

むしろ評者としては、ユルスナールの造形した「王仏」^{ワシフ}がひたすら美の世界に陶醉して、現実には同性愛者の弟子「玲」^{リン}の手を借りねば日々の生活もままならぬ唯美主義者藝術家の面影を深く宿しているのに対して、ハーンの「果心居士」が信長をも手玉に取る豪胆な大酒呑みの策士の風格を備えている差異に注目したい。皇帝の命で斬首されたはずの「玲」がその首に赤い襟巻きを巻いて、絵のなかから舟を漕いで師匠を迎えにくる趣向を、平川氏は「巧みな美化であり、いたわりではあるまいか」と評価するが（二三頁）、これはその直前に示された「弟子の血が緑の舗石につけた深紅の美しいしみ」の描写を「好きになれない」とする価値判断とも矛盾した、自らを偽った判断ではあるまいか。ここにユルスナールの三島由紀夫との親和性を感じる点は評者も同感だが、これはむしろ悪趣味な

描写にみえる。が、重要なのは、ここでまだ画中の虚構の世界に通じていない無知を暴露する王仏に対して、弟子のはずの玲が主導権を取って、この虚構世界への船頭役を堂々と演じる、という逆転だろ。

ユルスナールの描く世界は、ひたすらこの虚構の美のなかに逃避する姿勢において、世紀末の美学を色濃く引きずっている。実際、玲の妻が王仏の肖像のモデルとなることで生氣を肖像に吸い取られ、やがて紅梅の枝に首を括って自死に至る経緯は、エドガー・アラン・ポーの「楕円形の肖像」からエミール・ゾラの『作品』を通じてオスカー・ワイルドの『ドリアン・グレイの肖像』に至る系譜を踏襲している。切られた首といい、水が満ちた宮中でメドゥーサの蛇よろしく水中を漂う宦官たちの弁髪といい、そのなかに睡蓮のようにぼつかりと浮く皇帝の頭部といい（こうした要素も平川氏はきちんと列挙している——二四頁）、ユルスナールの世界は、とりわけ今日から見れば、アール・ヌーヴオー風の裝飾に東洋の味付けを施したというかぎりで、まことに典型的なオリエンタリズムの図式に吸収される——なかでも漢詩を意識したと思われる対句の多用は、文体評釈の対象たるだけの精巧さを湛えている。晩年のユルスナールの未完の著作『牢獄回』はこの「東洋趣味」の唯美主義という限界を突き抜けているのか。その歌舞伎論はいかにミメシスの美学を脱しているのだろうか。それを論ずるのは、この書評の範囲を越える。

それではハーンにおける「オリエンタルな夢」とは、いかなる性格のものだったのか。

ハーンの英文は、朗読すると、聴衆を一種、磁力のようなもので引き付ける。その様は、評者もまた右に述べたダブリンの学会で実際に体験する機会を得た。例えば最初に信長のまゝに「示されたときには値段もつかない名画であった果心居士の掛け物は、百両で買い取られて改めて広げられると、やや色褪せて生氣に乏しくなったように見える。どうしたことかと尋ねる信長に、居士はぬけぬけとこう答える。百両に値踏みされたのだから、今は百両の価値しかない画面となっただけのこと、と。物語に聞き入っていた聴衆は、これには声をあげて笑ってくれた。深刻ぶった「東洋の神秘」などとは無縁の、意表をつく機知である。

だがそれだけではあるまい。ここにはまた、作品の価値はそれを鑑賞する者の眼力によつて左右されるという、例えば岡倉天心の『茶の本』がボストンの上流階級に伝えようとした教訓も共鳴する。藝術作品の価値は作品に内在するのではなくて、鑑賞者との交感のうちにはじめて成就される、というわけだ。この趣向を原作から抽出し、敷衍し、活用したハーン。それに対してユルスナールが伝えるのは、ひたすら現実を越え、鑑賞者を超越して孤立する美の世界だ。絵に囲まれて育った皇帝は、長ずるにおよんで帝国の現実を知り、その版図のあまりの醜悪さ、その住民のあまりの猥雑さに愕然とし、虚偽の美、絵画という架空の樂園を教えた画家の罪を糾す。この糾弾の長口舌を短編の中心に据えるユルスナールと、詭弁を弄するしたかな市井の居士の立ち回りを余裕たっぷり描くハーンと

の選択の差。

いまひとつ、ユルスナールとハーンの違いをきわだたせるのは、「絵の魂」という考えの有無だろう。ユルスナールも「画龍点睛」（二五五頁）という言葉を知っていたに違いないことは、「王仏はいかにして救われたか」（原題直訳）の一節にみえる「王仏は彼が画面の眼球に与える最後の筆致によつて絵に生命を与える権能をもっていると言われていた」といった表現からも推測できる。だがそれに続いて、王仏の描いた番犬を見れば盗賊も逃げ出すといった逸話を示唆するのは、あくまで本物そっくりの生命感に由来する威力であつて、それは伯牙の琴の響えが訴えるような、楽器に籠もる樹木の霊といったものとは異質だろう。この「霊の世界」の評価が、平川ハーン論の核心をなし、かつその評価の分かれ目ともなるようだ。

本書と相前後して出版された平川祐弘編 *Rediscovering Lafcadio Hearn: Japanese Legends, Life and Culture* (Global Oriental, 1997) への書評 (*Japan Times*, March 12, 1997) で「ナルド・リチーは、『ヒラカワはハーンがイチカワ・コーサイから盗みを働いたにについては、いたってあいそが良いのに、マルグリット・ユルスナールがハーンから彼女の『東方綺譚』のひとつを盗んだといつて糾弾している」と、やや神経症ぎみのコメントを入れている（ちなみに本書には、ここまで紹介した論文が、やや短かい英文初出の学会発表原稿に近いかたちで掲載されていて、その拡大版がすでに別途平川・鶴田編『アニメズムを読む』（新曜社、一九九四年）に収められていることも、同書註に明記されている）。平川教授の意図がユルスナールの「盗用」を難詰するというよりは、むしろハーン利用の可能性を仮説として提出するにあつたことは疑いないが、文学的

処理としてユルスナールよりもハーンの手腕に軍配をあげる傾きの
あることは否定できず、またそうした著者の、いわば主観的な好悪
の判断が、むしろ拡大日本語版で付加される一方、註は簡略化され
ていることは指摘しておきたい。

だがここで評者が注目したいのは、典拠の再話による文学的效果
の創出、影響・系譜の還元といった学術的操作と、作品の伝える
「霊」に重きを置く著者のイデオロギーとの間を取り持つ、論理上
の双同性である。

3

『オリエンタルな夢』は、すでに定評ある平川氏の比較文学的研
究の手法とその手腕を堪能させてくれる、名人藝摘いのエッセーを
集めた著作である。「小泉八雲と霊の世界」では「子供を捨てた父」
という出雲の持田浦に取材した物語が、ハーンの東京大学での講義
「イギリスのパラッド」で取り上げられた「残酷な母」と関連づけ
られ、孟蘭盆と万聖節との通底性からハーンの感応した霊の世界が
探られる。ハーンの神道理解の裏にはフルステル・ド・クーラン
ジュの『古代都市』読書の経験、といった平川氏自身が明らかにし
た要素のみならず、カトリック作家クロードルや、自由思想家アラ
ンとも連なる先祖崇拜への同感があつたとされる。「祭りの踊り」
ではロティの「アフリカ騎兵」に見られるバンバラ族の踊りや、放
浪の楽師にして語り部たるグリオについての記述と、ハーンの世界
音楽への開かれた感性とを繋ぐ触発の筋が辿られ、その「刺戟伝播」
の系譜のうえに柳田國男の『遠野物語』の世界、そして『雪国の春』

に収められた「清光館哀史」が記す、陸中小子内の盆祭りの採取風
景が吟味され、彼らの目と耳が捕えた「異郷のヴィジョン」への共
感ある記録に、著者は先祖の声を聞く。

さらに「ハケルタマ」ではハーンのシンシナティー時代のルボル
タージュと島崎藤村の『千曲川のスケッチ』にみられる屠牛の場面
の描写手法の比較という意外な視点から、藤村のスケッチがミレー
ばりの油絵写生になつてゐるのに対して、シンシナティー時代の
buesome 好みのハーンのセンセイショナル狙いの華麗なる原色の
声高な誇張描写が、日本での晩年には、あたかも単彩の墨絵を思わ
せる低声の *blond* な境地へと昇華された様を物語る。

続く三編がいわゆる怪異談にちなむ話題で、「果心居士の消滅」
に続いて、その背景となる東西の美学的姿勢を対比する「日本文学
におけるアニミズム」が収められ、ついで「江戸風怪談から藝術的
怪談へ」では、ハーンの「子を捨てた父」と、その東京大学におけ
る後任・英文教授、夏目漱石の『夢十夜』第三夜における、背負つ
た子供がほかならぬ「自分」の殺した子供だと悟らされるプロット
との類似から始めて、漱石の「第一夜」（全文が掲載されている）
とハーンの「お貞の話」との符合、さらには「第五夜」と「策略」
（怪談）に所収）との類似まで執拗に追跡し、「夢十夜」で漱石は
ハーンに「矢報いるところがあつた」とする推理を展開する。

ちなみにそこで取り上げられる漱石『草枕』には、画工が写生帳
に咄嗟に描いた世界を那美さんに見せて、「さ、この中へ御這入り
なさい」と言うのに、娘が答えて「まあ、窮屈な世界だこと、横幅
ばかりぢやありませんか。そんな所が御好きなの、丸で蟹帳」と
「言つて退ける」場面がある。舟に乗せた魂送りとか、絵のなかの

世界への「引つ越し」というモチーフにも、異界への通路への興味という点で、案外漱石とハーンには通ずる節が見られるようだ。

最後に集められた三編のうち、まず「御神木が倒れた日」は、「天皇陛下がお亡くなりになった」という一文から始まり、ハーンの「一六桜」と『怪談』に収められた「青柳の話」の樹霊に事寄せて、この帰化作家が人と樹霊との交感を察知できる心の持ち主だったことを説き、そうした「アニミスト的な心情」の根幹をなす「神道という原初的な文化」を跡づけ、かかる「まつりごと」の祭司としての天皇家の位置を振り返る。つづく「夢の日本が現実の日本か」は『英語教師の日記から』を題材に、そこでハーンが取材した松江の生徒たち一人一人の実像を丹念に再発掘することを通して、ハーンの創作家としての周到な材料集めと丹念な取捨選択の技巧を、現実との子細な違いのなかに逆照射するのみならず、漱石『坊っちゃん』のいかにも自己中心な状況把握との異同にも目配りして、ハーンの観察の濃やかさを際立たせる。

ところで著者はそうした入念な作業を、チェンバレン晩年のハーンへの冒瀆的評価に対する「名誉回復」の試みだと規定するが、これは却ってこの学術的論考の射程を矮小化するものではないか。そもそもハーンの一生は「悪夢に終わった」とするチェンバレン晩年のハーン評が、「ハーンの文学史上の死命をも制したほどの破壊的効果をもっていた」（二九八頁）と言い切れるのか、評者としては疑念が残る。むしろ旧友に対する評価に惨めな改竄を加えるという「愚行」を犯し、またそれを没後に利用（＝悪用？）されることになったチェンバレン晩年の悪夢（これは既に平川氏が『破られた友情』で分析した通りだ）こそ哀しむべし、また晩年の英王堂やウ

エイリーの周辺や、その後の時代には、政治的のみならず、学問的にも、ハーンへの手放しの称讃を躊躇わせる状況が、すでに押し止めがたく進行しつつあったのではなかったか（二〇一頁）。

最後の「異文化を生きた人々」は、著者による同題編著の序章に筆を加えたもので、ハーンという「極端」をひとつの範例として、異文化理解のありかたを対比列伝として描き出してみせる。初出のいささか性急な筆致は、補筆によって均衡をまし、著者長年の蘊蓄を傾けた記述の密度と円熟には並々ならぬものがある。だが、評者としては、「ハーンをリトマス試験紙として」異文化理解の適否を論じる論法そのものに、いささか違和感を禁じ得ない。

例えば札幌農学校の「クラーク先生」は祖国で「まったく無名」なるのみならず「山師まがいの悲惨な晩年を送」り、また「熊本バンド」のジェーンズ大尉は帰米後、世間からは爪弾きにされ、妻からも逃げられ、宣教師たちからは危険人物視されたこと、また、近くはドナルド・キーン教授といった日本で高名な日本学者が、本国では無名に近いことに、著者はすこぶる敏感なのだが、はたして帰国後の悲慘が日本での影響力の是非を判別する基準となりうるのだろうか。またたとえキーン氏が印税収入の大部分を「研究対象国」で稼いでいるのだとしても、それはひとりの外国人学者の誉れでこそあれ、氏の学者としての評価にどう係わるのか、評者には理解しがたい。むしろ祖国と日本での評価の落差とその落差を生み出した社会的機構こそ、比較文化的探求の対象とすべきものではあるまいか。

「キリスト教宣教師が大嫌い」というハーンの「異常さ」がいつのまにか乗り移って骨肉に染み入ってしまったことをあえて否認し

ない著者は、宣教師の使命感や優越感を、ハーンは日本理解の妨けとなるものと斥けた、とし、その判断が正しかったことの証拠に、一世を風靡した左翼系北米知識人、宣教師の息子たる E・H・ノーマンの日本語知識の「真相」を暴露せずにはいられない（こうした図星に溜飲を下げる読者もあろうが、それはひとつ間違うと、かつがれた有名人へのやっかみとも映りかねまい）。となれば、こうした宣教師の子弟のひとりで、宣教に肯定的なライシャワーのハーン評価が低かったのも、著者の指摘するのとおり、まことに辻褃のあう理屈だが、逆にだからといって、ハーンが理解できたことを理解できなかった、という理由で比較する相手をおしなべて貶めるのなら、この対比列伝はいささか鼻白む結果ともなりかねまい。

路傍のお地蔵様に共感を寄せたハーンに対して、そこに病的な小人しかみないロティ。日本人には宗教心がない、神道は宗教の名に値しない、と当時の「宗教」の定義に沿った——その限りではさこぶる客観的だが、今から見返せばオリエンタリストとしての偏見に浸っていたことはあまりにも明白な——判断を下し、日本の音楽に親しめず、また非白人の現地女性との法律上の結婚は忌避したチェンバレンに対して、万事それとは好対照だったハーン。プロテスタント社会の「罪の社会」に対して日本社会を「恥の社会」と図式的に規定したルース・ベネディクトに対して、「ご先祖様の御遺牌に対して申訳けがたたない」という（もとより「日本人」専売特許ではないことは、平川氏自身、クロードルやアランを参照して立証したはずの）道徳観を理解しえたハーンの希有な直観力……。日系人の犯罪発生率の低さもこうした「神道的」道徳観と関係があるらしいが、ここには西欧至上主義への糾弾と、戦後日本の自虐的自

意識（これはすでに戦後日本史の一部である）への反作用とが、日本的価値観への共感的理解を西洋に向けて発信したひとりの英語圏日本帰化作家の家庭的幸福を核として情緒的に癒着してはいないだろうか。

「研究対象国の長所を率直に認め、それを鏡として自国の短所を指摘するだけの知的誠実さ」（三三三頁）はたしかに大切な姿勢だが、それはなにも（かつて優位にあった）西洋人へのみ要求されるべき格率ではあるまい。ハーンの日本の霊性尊重も、それが国粹的教条から自由たりえたからこそ尊いのだから。

[注]

- (1) Angelica Rieger, "Comment Wang-Fô fut sauvé," in Jean-Pierre Guillerm (éd.), *Récits/ta bleaux*, Lille: Presses universitaires de Lille, 1996. Konrad Czyski, "Marguerite Yourcenar et l'art," in *Actes du colloque tenu à l'Université de Tours en 1988*, Tours: Société internationale d'études yourcenariennes, 1990, p.304.
- (2) Hirakawa Sukehiro, "The Final Disappearance of 'Kwasin Koji'," in Tsuruta Kinya (ed.), *Nature and Selfhood in Japanese Literature*, University of British Columbia, 1993.
- (3) なお同じ逸話を漫画という表象手段で効果的に映像化した例が、白土三平の「妙活」（一九六三年、「大摩のガロ」小学館、一九九二年）にあるが、これについては四方田犬彦の「漫画原論」（筑摩書房、一九九四年）の卓抜な分析も参照のこと。ただし四方田氏の著書で、ハーンの出版が「悪信僧都の話」となっているのは「愛嬌」。またここで白土はハーンのみならず司馬遼太郎の「果心居士の幻術」「飛び加藤」（ともに一九六一年、「果心居士の幻術」新潮文庫、一九七七年）をも参照しているようだ。



9784770409430

ISBN4-7704-0943-5 C3390 ¥3700E

定価 (本体3,700円+税)

No.70 ISSN 0437-455X August 1997



1923390037007

Hikaku Bungaku Kenkyu
Studies of Comparative Literature
Special Issue: East Asia

Kawamoto K.: [Foreword] *The Comparative History of East Asian Literature in Progress* ... (1)

Nishimaki I.: Is Van Gogh a Literati Painter?: On Feng Zi-Kai's View of Van Gogh ... (4)

嚴基珠: 近世 斗韓・日儒教訓書: 『東國新續三綱行實圖』『本朝女鑑』

『本朝列女傳』을 對象 으로 (29)

Nobuhiro S.: Legacy and Invention in *rakugo*: From Enshō II to Enchō (49)

Watanabe T.: On J.D.Salinger's "Down at the Dinghy": Salvation for an Infant's Family ... (67)

Nakagawa K.: A Story of Mother and Son: Tsurumi Yūsuke's *Mother* (90)

[Tributes to Professor Kanda Takao]

Kamei S.: Mr.Kanda as My Instructor (110)

Kobori K.: Memorial Address (114)

Komiya A.: In Memory of Professor Kanda Takao (117)

Kotajima Y.: Professor Kanda in Taiwan (120)

Reviews

Matsuura S.: *Bashurāru: Kagaku to Shi* (Bachelard: Science and Poetry) by Kanamori O. ... (123)

Inaga S.: *Orientalu na Yume: Koizumi Yakumo to Rei no Sekai* (Dreams of the Orient:

Koizumi Yakumo and his Ghostly World) by Hirakawa S. (128)

Sugawara K.: *Ibunka eno Shisen: Atarashii Hikaku Bungaku no Tameni* (Looking at Foreign Cultures: Comparative Literature Reconsidered) ed.by Sasaki H. ... (134)

Koyano A.: Can We Surmount Western Modernity?: An Essay on Two Books: *Ibunka eno Shisen* ed.by Sasaki H. and *Hikaku Bungaku wo Manabu Hito no Tameni* (An Invitation to Comparative Literature) ed.by Matsumura M. (143)

Ogawa T.: *Azoara: Furansu Shōchōshi to Nihon no Shijin Tachi* (Blue Sky: French Symbolist Poetry and Modern Japanese Poets) by Mizushima H. (150)

Suzuki H.: *'Amae' de Bungaku wo Toku* (Interpreting Literature through the Concept of 'Amae') ed.by Hirakawa S.and Tsuruta K. (153)

Kimino T.: *Wakaki Paruku / Miwaku* (A New Translation of Paul Valéry's *La Jeune Parque / Charmes*) by Nakai H. (158)

Chan J.: *Aru Meiji-jin no Chōsen-kan: Nakarai Tsui to Nicchō Kankei* (Nakarai Tōsui's View of Korea) by Kamigaito K. (163)

Le Rond-Point

Kawamoto K.: Examiner's Comments on Ms.Enomoto Yasuko's Doctoral Thesis, "Western Music and Modern China" (168)

Sashimura K.: Ms.Enomoto's Thesis Defense (170)

Kotajima Y.: Notes on the Japanese Expression "Subekaraku" (172)

Mizuno T.: Reading Nakarai Tōsui's *Kosa Fuku Kaze* (Wind Blowing on the Western Desert) (176)

Abstracts (1)

Society of Comparative Literature
University of Tokyo
Todai Hikaku-Bungaku-Kai